

とっとり NOW

鳥取県総合情報誌 vol.122

2019
Summer

お気に召すまま
自由に優雅に

わがままキャンプ「グランピング」

巻頭特集

特集

地域で結束、活気と潤いを
住民主体のスーパー運営



「3つの光」の
鳴き声が名の由来

写真提供＝NPO法人

日本野鳥の会鳥取県支部会員

増馬
健一



巻頭:FBI DAISEN



特集:支え愛の店ながせ

とっとり NOW

鳥取県総合情報誌 vol.122
2019 Summer

あーとの森

染織 古澤 順子

2

卷頭
特集

お気に召すまま自由に優雅に わがままキャンプ「グランピング」

4

生きものセンサー365
K原さんちの里山Diary

価値ある体験、生きもの探し

16

ここにこの人
Human Life

藤田 和子 日本認知症本人ワーキング
グループ 代表理事

17

きらり匠人
継承の技が語る世界

塗師 橋谷田 岩男

20

特集

地域で結束、活気と潤いを 住民主体のスーパー運営

22

花咲くYokai談
水木しげると身近な妖怪たち

ナマハゲ

28

鳥取のうまい

和食で昇華するジビエ料理

29

Viva!とっとりLIFE
輝くIJUターン者たち

パティシエ (倉吉市)

30

企業紹介

有限会社 ホームケア渡部建築

32

文字の迷宮をゆく～つれづれ書林女子～『8月のソーダ水』
Voice

33

読者プレゼント・編集後記

34

●表紙イラスト● ASAKURA KOUHEI (朝倉 弘平)

絵かき。1983年宮城県仙台市生まれ。自然との交感をテーマにした水彩画を描く。我が家は食材の宝庫。フキ、タケノコ、ウドをはじめ、スモモ、ビワ、ギンナンなど、1年を通じて季節の恵みをいただいている。表紙の橙色の花・ノカンゾウも若芽をお浸しにして食した。



小学生でも指で織れるミニタペストリー (24×33cm)

潮騒が聞こえた。壁掛けのつづれ織り、タペストリーの『波の華』を見た瞬間だ。羊毛・木綿・絹・化繊など、材質を生かした立体感が際立ち、渚に押し寄せる泡粒の情感を豊かに歌っている。話を聞けば原点は、やはり海辺の故郷・赤崎にあった。

旅館業だった生家では、多数あった書画骨董類に親しみ、近くには国際的な写真家・塩谷定好（※）がいて、趣味人の父に連れられて親交を結び、海岸へよく出かけては写生した。古澤順子さんの色彩感と絵画性は、この環境で少女時代に育まれたものであろう。

とはいって、道程が順調だったわけではない。京都の大学で意匠を学んだ後、デザイナーを目指して上京するも、都会生活になじめず帰郷。地元の染織工房で修業して、「機織りで一生暮らそう」と決意し、独学でタペストリーの道へ。

日展への出展を目指し、京都や広島など各地で開催される研究会に参加するも、当初は「織り方が粗い」と一蹴されたことも。それでもめげずにゼロから猛勉強し、見事、初出展で入選を果たした。原動力は「やっぱり糸が好き、機のリズムや音も好き」。日本の狭い住宅では、装飾としての条件は厳しいが、必需品でなければ無駄なのか。自問しながら心の「海」を、きょうも果敢に織り続ける。たおやかな夢追い人なのである。

※塩谷定好(1899-1988)=大正から昭和初期にかけて活躍した、日本写真界のパイオニア。セピアの独創的な映像美で国際的にも評価が高い。写真集に『海鳴りの風景』。



タペストリー『波の華』(2007年、第39回日展出品作、180×125cm)

文／角秋勝治
写真／青木幸太
Forest of Art

「海」を織る夢追い人 染織 古澤順子



ふるさわ・じゅんこ
1950年、鳥取県赤崎町(現琴浦町)生まれ。70年、京都成安短期大学意匠科卒。吉田たすく手織工房(倉吉市)で学ぶ。79年、日本現代工芸美術展初入選。89年、日本海美術展(富山県立近代美術館主催(当時))入選。90年、現代日本の染織展(ニュージーランド国立博物館主催)に招待出品。2003年、日展入選。現代工芸美術家協会会員。倉吉市「ありのみ工房」主宰。

お気に召すまま 自由に優雅に

わがままキャンプ「グランピング」

Glamping

豪華で優雅なキャンプができると
人気の「グランピング」^(※)。

さまざまなサービスを選択し、

自分好みのメニューが組めるため、
初心者でも構えずに親しめるのが特徴だ。

大自然のなかで孤独を満喫するもよし、
ギター片手に仲間と乾杯もよし。

この夏、ひと味違う

“わがままキャンプ”を味わってみては？

文／松村 亜紀子 写真／萱野 雄一

※グランピング＝グラマラス(魅力的な) + キャンピング(キャンプ)
を組み合わせた造語。

ベース」は、日本一大きい池といわれる湖山池に面しているキャンプ場だ。場内は芝生に覆われ、ビンテージもののキャンピングトレーラーがシンボルとして銀色に輝く。JR 鳥取駅から車で15分ほどとアクセスは抜群。すぐそばを交通量の多い県道が走っているにもかかわらず、そこだけがぱつかりと切り離されたような空間が形成されており、プライベート感たっぷりだ。

ここの大特徴は、約1000坪の敷地全体を貸し切りにできること。立地的にも夜まで騒音を気にしなくていいため、音楽のイベントも多く、子ども会の日帰りバーベキューの会場としても人気だ。昨年は100人規模の結婚式も催された。手作りで木のベンチを作り、頭上に張り巡らしたロープからたくさんのドライフラワーをぶら下げるなど、ここでしかできない、緑あふれる華やかな祝宴に。「新郎新婦から発案だったんです。初開催で少し不安もありましたが、大好評でほっとしました」と管理人の新家憲一郎さん。

「自由にプランをたてて仲間と楽しんでほしい」と新家さん



魅力はプライベート感

さらに、普段は見ることのできない泊まる場合のテントは、お好みに応じて多種類用意。三角形のティピーテントは、中でストーブも使えるピースオーブン（土と藁で出来た薪窯）で手作りピザを焼くこともできる。

またここではペットの同伴も可能で、一緒に食事や遊びもOK。バーべキューはもちろんのこと、備えつけのアースオーブン（土と藁で出来た薪窯）で手作りピザを焼くこともできる。



新家さん手作りのアースオーブンを使えばピザも焼ける
=写真提供:新家憲一郎



元気をチャージ
“隠れ家”で



定期的に開いている音楽イベント。ジャンルはさまざま、青空のもと観客とともに盛り上がる
写真提供：新家憲一郎



敷地はもともとヨット活動の拠点だった。小さい頃からヨットに親しみ、選手として国体や世界選手権で活躍した新家さんにとって湖山池は、なじみの深い場所。以前、小学校教諭として働いていた時、理想と現実のズれに心身の調子を崩し、無力感で仕事が続けられなくなつたことがある。ヨットからも離れ、心が沈んだ時期も唯一、ここには来ることができた。

当時、ヨット活動拠点ではなくなつたこの土地は、ジャングルのよ

うに草が茂っていたが、「他にすることもなくて」と、草刈りをするうちに元気が戻ってきたという。「頑張った成果が目に見え、それが自信回復に繋がったのが良かった」。

「来る人の夢を実現できる場所でフェイエントを開くなど、活用法を探り始めた。同じ頃に、依頼を受けた個人塾を始めたこともあり、「子どもたちとアウトドア活動をする拠点にしよう」と思い、2014年に「湖山池ベース」をオープン。

キャンプのほか、カフェや音楽イベントなども開催している。湖山池に抱かれて一晩眠れば充電完了。翌朝、新たな一步を踏み出せそうだ。

自由にカスタマイズを



ベントなど、多目的空間として場を提供している。定期的に開いている音楽イベント「イケオト」は、ミュージシャンに出演を依頼するのではなく、立候補で出演者を集めている。結果的に湖山池ベースを愛してやまない人たちが集う形が定着してきたようだ。

また、「天の川の下で、とにかくたき火がしてみたい」と神戸市から訪れたある家族は、しばらく炎を見つめた後、「癒やされました」と泊まらず帰つていった例も。「カスタマイズできるキャンプ場」と考えてもらえたなら」と新家さん。ちょっとやってみたい人も、得意な人も、それぞれの方法で自由に楽しめるのだ。



たき火はキャンプの醍醐味（写真左）。貸し切りで企画されたガーデンウェディング（写真下）＝写真提供：新家憲一郎

●湖山池ベース

- 所 鳥取市良田（WEBの地図を参照）
- WB <https://koyamaikebase.jimdo.com/>
- <https://www.facebook.com/koyamaikebase>
- ✉ koyamaike.b@gmail.com
- 情報□
予約はメールで。予約日の2ヶ月前から可能。
入場料＝大人1500円、小学生以下1000円。
レンタルテントは3人用5000円（設営費込み）～、
テント持ち込み料は1張1500円。
貸切利用料は10000円が別途必要。
(すべて税込み)



夜になるとプラネタリウムのあとで、満天の星に抱かれる。写真提供：新家憲一郎



広大な敷地をコツコツ整備

カーナビゲーションの案内に従い、大山中腹の細い道を進んでいく。「あれ、間違えたかな」と不安になりかけたころ、両側から繁った木のトンネルを抜けると、明るくさわやかな風が吹く別世界が広がっていた。

「FBI DAISEN」(伯耆町)は、約3万坪、東京ドーム2つ分を超える広大な敷地を持つフリーサイトのオートキャンプ場。とにかくその広さに圧倒される。

目の前に広がる芝生の原っぱは、奥へ向かってゆるやかな上り坂になり、背景には雄々しい大山が迫る。緑の木々の合間に、白いテントや木を組んだ星見櫓、真っ赤な三角形のキャビン。日常では見ることのない景色と、光や風の心地よい刺激。肩の力もストンと抜け、深呼吸したり、伸びをしたり。さて、どこで何して遊ぼうか、と腕まくりしたくなのだ。

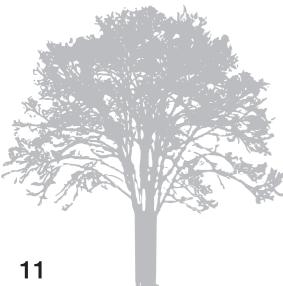


FBI DAISEN

First Class
Backpackers
Inn

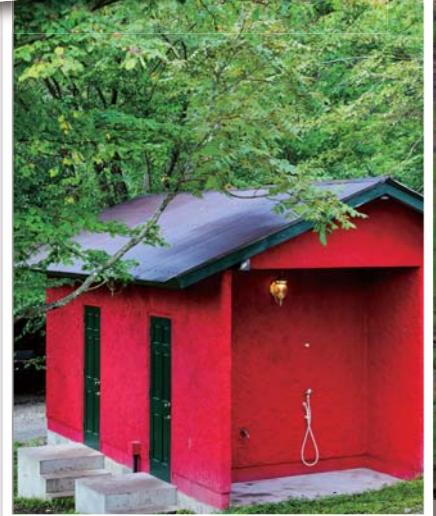


非日常がよりどりみどり





個性あふれる 建物と手作り感



トイレ(写真上)やシャワー棟(写真下)もそれぞれ個性的なデザインで随所に工夫が施されている



宿泊のスタイルで一押しは、木造のキャビン。高温多湿の日本の気候に強い優れもので、使う時だけ張るテントに比べ、「建てる」と、そこで景色の一部になっていくのがいい」と、少しづつ建て増しをしている。昨年10月に完成したばかりの「CABIN A」は6人まで宿泊可能。薪ストーブ付きで木の香りが心地よく、エアコンや冷蔵庫、台所道具を備えているため、手軽に宿泊できる。

テント泊ならば区画はなく、エリア内のどこでも好みの場所に張れて、車も横付けできる。また、常設のテントは10基を超える、それぞれ個性的な特徴があり、大人数でもカツプルでも応じられる仕様を取り揃えている。例えば、星見櫓付きでは弓ヶ浜半島に沈む夕陽を見たり、満天の星を見上げたりと、利用者のプランも膨みそうだ。



宿泊のスタイルで一押しは、木造のキャビン。高温多湿の日本の気候に強い優れもので、使う時だけ張るテントに比べ、「建てる」と、そこで景色の一部になっていくのがいい」と、少しづつ建て増しをしている。昨年10月に完成したばかりの「CABIN A」は6人まで宿泊可能。薪ストーブ付きで木の香りが心地よく、エアコンや冷蔵庫、台所道具を備えているため、手軽に宿泊できる。

テント泊ならば区画はなく、エリ



運営する株式会社BRM（本社・大阪市）が手がけるキャンプ場は、ここ大山で2つ目。1つ目は海沿いにある「FBI AWAJI船瀬ビーチイン」（兵庫県）だ。閉鎖した同キャンプ場の運営を、キャンプ好きの現在のスタッフたちが2010年に引き継いだ。マネージャーの松本真一さんは、「皆、異業種からの転職。大きな冒険でしたね」と当時を振り返る。その2年後、「海の次は山で」と大山を選んだという。

大山の敷地は、原生林の開拓からという全くゼロからのスタート。近

くの湧き水を汲み、発電機を持ち込んでの作業だった。木を切り、水や電気を引き、受付などの建物を建て約3年かけて、すべてスタッフが手作りした。木を1本切るのも、「花は咲くのかな」「ハンモック用に残しておく?」など、都度話し合いながら手探りで進めてきたという。「素人だったから3年もかけて準備ができたんでしょう」（松本さん）。

2015年にオープンし、現在でも敷地内では、常に何か新しいものを作り続けている。



景色や星などを眺めることができる星見櫓付きのテント



「『素人集団』だからこそ、自由に設計できた」と松本さん

バーベキューでお腹が満たされたら、ハンモックでひと休み



ウッドデッキがあるレストラン・バー（左）

●FBI DAISEN (FirstClass Backpackers Inn)

所 西伯郡伯耆町小林706
☎ 0859-57-3428(問い合わせ・電話予約は10時~20時)
WEB <https://www.fbi-camping.com/daisen/>
休 5、6、10、11月は毎週木曜日、7~9月は無休。
営業は11月末まで。3月から予約受付、4月から営業開始。

□情報□
予約は電話かWEBで。宿泊の場合、利用料、キャビンやテントなどの使用料・レンタル料(持ち込みの場合は持ち込み料)、駐車料金が必要。
利用料=大人(中学生以上)1500円、小人(4歳~小学生)750円、3歳以下無料。
レンタルテント5人用5000円~。テント持ち込み料は1000円~。
駐車料金は乗用車1000円など。(すべて税別)
日帰りのデイキャンプ、ピクニックは10時~17時。(上記とは異なる入場料、駐車料金などがそれぞれ必要)。レストラン・バーのみの利用も可能。ペット同伴可。



女子トークもはずむバーベキューデッキ。
日帰りのデイキャンプで利用できる



大人だってぴょんぴょん跳べばハイテンション!
童心にかえるトランポリン



食事はレストランでも可能(写真右)。
アルコールが豊富にあるバーも常設(写真下)。



原っぱの真ん中には丸いトランポリンがあり、地面と同じ高さなので遊びやすく、子どもはもちろん、大人もついジャンプしたくなる。木にかけられたハンモックに寝そべればゆらゆらと心地よく、一秒で寝入ってしまう。一角にあるプライベートプールで、優雅にリゾート気分を味わうのもいい。

バー・ベーキュー・コーナーでは、食材

を準備してもらえる(要予約・日帰りも可)。自炊したくない人は、場内のレストラン・バーのウッドデッキへGO。風に吹かれながら食事を堪能したり、森の暗闇に柔らかく灯る明かりの下、お酒を飲んだりしていると、ふと異国にいると錯覚するほど、非日常の世界へと誘われていく。このほか、メルヘンチックなトイレ、木製の手すりの細工彫り、真っ白い牧場のような柵。場内に数々ある建物のそこかしこに遊び心が施されている。松本さんは「知識がないから、変なものも作れるんですよ」と笑うが、手作りの温かさに満ちており、これが魅力のひとつとなっている。

オープン当時は大阪や神戸など県外からの利用者が多かったが、徐々に地元を含む中国地方の人も増えてきたという。キャンプにとらわれず、「自然の中で寝泊まりできる遊び場と考えて、自由に使ってほしい」と松本さん。

誰と行くか、どう遊ぶか、楽しみ方の選択肢が多く、迷うのもまた楽しい。

原っぱの真ん中には丸いトランポ

リンがあり、地面と同じ高さなので遊びやすく、子どもはもちろん、大人もついジャンプしたくなる。木にかけられたハンモックに寝そべればゆらゆらと心地よく、一秒で寝入つてしまいまそう。一角にあるプライベートプールで、優雅にリゾート気

分を味わうのもいい。

バー・ベーキュー・コーナーでは、食材

を準備してもらえる(要予約・日帰

りも可)。自炊したくない人は、場内のレストラン・バーのウッドデッキへGO。風に吹かれながら食事を堪能したり、森の暗闇に柔らかく灯る明かりの下、お酒を飲んだりしていると、ふと異国にいると錯覚するほど、非日常の世界へと誘われていく。このほか、メルヘンチックなトイ

レ、木製の手すりの細工彫り、真っ白い牧場のような柵。場内に数々ある建物のそこかしこに遊び心が施されている。松本さんは「知識がないから、変なものも作れるんですよ」と笑うが、手作りの温かさに満ちており、これが魅力のひとつとなっている。

オープン当時は大阪や神戸など県外からの利用者が多かったが、徐々に地元を含む中国地方の人も増えてきたという。キャンプにとらわれず、「自然の中で寝泊まりできる遊び場と考えて、自由に使ってほしい」と松本さん。

誰と行くか、どう遊ぶか、楽しみ方の選択肢が多く、迷うのもまた樂しい。



ロングヘアをなびかせて、さつそつと現れた女性は、
国内初の認知症当事者団体、
一般社団法人日本認知症本人ワーキンググループ（JDWG）
代表理事の藤田和子さん。
「認知症になつたらおしまい」では決してない。
逃げずに向き合いながら、たくさんの人と手を携えて、
いい時、いい人生を歩んでいる。

里山の生きものにアンテナを張り巡らせ、
日々奔走する桐原夫妻の日常をエッセーと写真で紹介。

文・写真／桐原 真希



価値ある体験、生きもの探し

盛夏、この季節は水辺の観察会の依頼が連日舞い込む。それは子どもたちと一緒に童心に帰る貴重な時間だ。なんてことのない水路や小川で、タモ網を持った探検隊は捕まえ方を教わると、次々に『獲物、を見せにくる。意気揚々とだ。

ドジョウにサワガニ、アカハライモリ…、中には絶滅危惧種に指定されている『メンバー』も珍しくない。こんなフィールドが身近にあるのも贅沢なものだ。しかし生き物のにぎわいがある水の流れは、ここ南部町からもどんどん減っているのが現状だ。

そして子どもたちも塾や部活で慌ただしく、「川べり遊び」は日常的ではなくなった。何ものにも代えがたい価値ある体験なのに、いまやイベント以外では得にくくなっている。

それでも小魚やエビを自分の網で捕まえた思い出は、心の深いところに刻まれていく。「わあ～きれい！この魚、初めて見る～」「カエル握ったら鳴いたよ！」。感じ方はそれぞれ多様だが、表情は一様にキラキラ。

この夏も小さな探検隊と、何を発見し、どんな驚きや喜びを共有できるか。想像するとワクワクする。

観察会で捕まえたアカハライモリ、ツチガエル、カワムツなど多種類の生きもの



Profile

- ▼ きりはら・まさき=東京農業大学農学部卒業。1996年から自然観察指導員として活動。里山関係の体験事業を行う「もりまきフィールドネットワーク」代表。2児の母。
- ▼ きりはら・けいすけ=東京農業大学農学部卒業。1999年に転職で神奈川県から米子市に転入、2003年に南部町へ移住。現在、米子水鳥公園主任指導員。野鳥をテーマとした環境教育活動や調査研究、湿地保全活動などに従事する。



認知症とともに生きる

「本人の声を聞いて当事者団体を立ち上げ」

45歳の時に若年性アルツハイマー病ではないかと診断された。瞬時に頭をよぎったのは認知症になつた義母の姿。「いつまで自分が自分でいられるのだろう」と一時は大きな不安に襲われたが、それまで抱いていた認知症のイメージと、実際の自分の症状はずいぶんかけ離れていることに気付く。

「記憶や実行力に多少の困難はあっても、家族や友達のことはちゃんと分かるし、普通に生活も送れる。病気の症状や進行具合は一律ではないのに、世間でマイナスの情報のみが広まっているせいか、本人に様子を聞くことの大切さが知られていなかつた」。

認知症のことを介護問題としてではなく、人権問題として捉えて欲しいと感じ、2010年に、人権活動を一緒にしてきた地元仲間と一緒にして、『認知症とともに生きる希望宣言』を作成への協力や、「認知症とともに生きる希望宣言」の表明を行なうなど、精力的に活動してきた。最近では、認知症や認知症の人に関する基本法の策定についても、政府関係者などと意見交換を進めている。

当事者と同等の立場で助け合うパートナー

JDWGでは、当事者の目的に賛同し、活動を共にする人を「パートナー」と呼ぶ。支援者やサポートナー」と藤田さん。

当事者と同等の立場で「助け合うパートナー」は時と場所によって変わります」と藤田さん。当事者が住んでいる地域に、それぞれのシーンに応じたパートナーがいれば、暮らしの質があがるという考え方がある。今日のパートナーは、金谷佳寿子さん。J DWGの活動や、地元鳥取で「本人ミーティング」などを通じて、本人が笑顔になれるような地域作りを共にしている。

ふじた・かずこ

鳥取市出身在住。看護師として市内の総合病院などに勤務。認知症の義母を9年間介護した後、2007年6月、若年性アルツハイマー病と診断され退職。認知症になつても自分らしく暮らせる社会を目指し、鳥取のほか、全国各地で活動している。現在、JDWGの代表理事。著書に『認知症になつてもだいじょうぶ! そんな社会を創っていこうよ』(徳間書店)。娘3人は独立し、夫と2人暮らし。



「お互い信頼し合えるパートナー」とほほ笑み合う藤田さんと金谷さん



「認知症とともに生きる希望宣言」を発表した会見(2018年11月)=写真提供:JDWG

◎一般社団法人 日本認知症本人ワーキンググループ(JDWG)

日本初の認知症の本人でつくる全国組織として発足。認知症とともに生きる人が、社会の一員として活動することで、よりよい社会を創りだしていくことを目的としている。

WB <http://www.jdwg.org>



きらり匠人

継承の技が語る世界

日本独自の伝統を守り、技術を受け継ぐ
県内の「光る匠たち」を紹介します。

智頭町の百年杉を使った曲げわっぱ弁当箱や、大らかな形で手に馴染む合鹿椀^(※1)。他にも、木地、ガラス、和紙、金属、陶器などに漆を施した商品が、展示スペースを彩る。漆工房「會州堂」店主の橋谷田岩男さん(63)は、塗師の矜持^(※2)を胸に、暮らしに身近な漆器の魅力を発信し続けている。

塗師 橋谷田 岩男

會州堂の創業は1993年。商社マンだった橋谷田さんが、妻・妙子さんの実家がある鳥取市に、漆器と自然食品を扱う店を構えた。福島県会津若松市の出身で、会津塗の塗師を父親に持つ橋谷田さんにとって、漆器は生まれた時から身近な存在。しかし、その当時、鳥取産漆器との出会いはなく、会津塗や輪島塗の漆器などを仕入れて販売していた。

転機は、鳥取県無形文化財保持者の蒔絵師^(※2)・2代目田中稻月さん(故人)との出会い。茶道具の棗を得意とするその古典的で繊細な意匠に圧倒された。そして塗師修行のため、京漆器のお膝元・福知山市夜久野町へ。「稻月さんの作品は、鳥取に質の高い漆芸文化が築かれていた証し。刺激され、5年間、基礎から学び直しました」と、振り返る。

店では制作した漆器販売の他、器の修理や金継ぎも請け負う。その一方で、故郷と離れたこの地で根を張り、戦後の高度経済成長時代に途絶えた鳥取の漆芸文化復活に意欲を燃やしている。

※1 合鹿椀=石川県能登町の合鹿地方で作られる漆器椀。

※2 薙絵師=漆で文様を描き、金粉・銀粉などを薙くことで加飾する専門職人。漆器は、器の素地を作る木地師、塗師、薙絵師の分業制によって作られる。

文/島香子 写真/田中良子

根を張り、漆芸文化復活に意欲



MEMO

耐久性・抗菌性に富む天然塗料、漆の原料は、漆木から採れる樹液。江戸時代から昭和30年代にかけ、佐治村(現鳥取市佐治町)は国内有数の生産地だった。橋谷田さんは上質な国産漆の产地復活を目指して、2016年佐治漆研究会^(※3)を立ち上げ、佐治町内の畠に120本の漆の苗木を植栽。徐々に増やし2千本を目指している。



トレイやペンなど工夫を凝らした漆製品の数々(写真上)。
工程によって何種類もの道具を使い分ける(写真右)



漆に顔料を混ぜると生まれる
バリエーション豊かな色合い

問 漆工房 會州堂
所 八頭郡智頭町山根119
☎ 0858-75-2228
営 10時~18時
休 水曜日

木地に麻を使って布着せをし、珪藻土と漆を混ぜた地の粉を施した後に錫び塗りを施した後、下塗り、中塗り、上塗りと、塗つては研いでの作業を丹念に繰り返す





地域で結束、活気と潤いを 住民主体のスーパー運営



文／鳥飼 明子 写真／田中 良子・山田 真実

スーパーを人口密集地に展開するのは、企業にとって当然の手法。そのため、少子高齢化で人口が減少した地域では、最寄りのスーパーが次々と消えていく。高齢者たちの痛手は大きく、移動販売車などの手立ても十分ではない。ならば、いっそ自分たちでつくろう——。地域住民が運営するこうした「住民スーパー」に注目が集まっている。

オアシス宝木



吹き抜けの造りをそのまま残し、昭和モダンな雰囲気が漂う店内



住宅街の少し細い路地を行くと、ノスタルジックな古民家に出合う。20年以上空き家になっていた商店が改裝され、鳥取市気高町宝木地区の買い物支援と住民同士の交流拠点に生まれ変わった「オアシス宝木」だ。店内は、土間と小上がりのある昔ながらの造り。改裝時に作り付けた木製の商品棚には食料品や日用雑貨がきれいに並べられており、丁寧な運営がうかがえる。開店は2011年11月。昔は町内に60を超える商店があつたが、徐々に減少。その後近くのスーパーもなくなったことから、危機感を覚えた地域住民の有志が集まり、鳥取県地域「支え愛」体制づくり事業の支援を得てこの拠点をスタートした。

「いらっしゃい」と出迎えてくれたのは、代表の本部享司さん。「お客様は午前中が多いですね。最近は『〇〇が欲しい』という予約注文が増えてきました」。12人のボランティアスタッフで運営。仕入れは週2回、早朝から鳥取市街に出かけ、卸売店や業務用スーパーで直接購入しているという。

「野菜は農家の人が出品してくれると人有很多いから、ここに置いとる土や肥料もよう売れる」。店舗隣の和室が「交流サロン」で、冬にはこたつを置き、利用者がゆっくりできるよう工夫している。その奥には広い座敷もあり、大人数の集いも可能だ。



「スタッフの高齢化もあり、無理をせずベースを崩さずやっていきたい」と本部さん



和室の交流サロンは、にぎやかな地域の社交場となっている

買い物のやりとりをしながらの雑談がコミュニケーションに



先生に習いながら、真剣にそろばんに取り組むお年寄り



オープンから8年、次世代になか

オアシス宝木
所在地：鳥取市気高町宝木841-1
電話番号：0857-82-2313
営業時間：10時～16時
休業日：月曜日、年末年始・盆

訪れた木曜日の午前中は「そろばん教室」の日。高齢者3、4人が集い、先生が読み上げる数字を聞きながらそろばんをはじいている。「いい頭の体操」になる」と好評だ。店先では買い物客がイスに腰かけて、1杯50円のコーヒーを飲みながらスタッフと談笑。ゆつたりとした時間が流れている。

起ち上がりから運営に携わるスタッフの藤原富美子さんは、「自分が暮らす地域をなんとかしたいという思いでやってきた。こうして人が来てくれることがうれしい」と笑った。

主に事業を始めたが、今は交流拠点としての役割が大きいのだとか。スタッフでほのぼのとした空間は、その名のとおり「地域のオアシス」となっている。



店には次々と地域の人々が訪れる



健康体操の後はお茶を飲みながら、おしゃべりに花が咲く



吉田さん（左）と松井さん
「楽しみながら前向きに続けたい」と話す



来店は高齢者だけではない。「小学校が来て宿題をしたり、お菓子を買ったり。孫みたいなもんで、かわいいですね」と松井さん。核家族が多い現代、多世代交流ができるのも、ここ的一大メリットといえる。

店铺は永江地区の真ん中辺りにあり、年配の人でも歩いて来られる便利な立地。月2回実施している「支え愛カフェ」の日は、約30人の高齢者が集う。認知症予防の取り組みや介護全般の相談に対応するほか、誰もが気軽に立ち寄れるカフェとして、米子市尚徳地域包括支援センターが運営する。作業療法士の指導による健康体操などをやった後、参加者みんなでお茶会でおしゃべり。にぎやかで笑い声が絶えない。

支え愛の店ながえ

心通うやりとりが魅力



日射しが差し込む店内。年配の女性はスタッフと会話しながら食料品の買い物を、近所の男性たちは窓際のテーブル席で囲碁を楽しんでいる。

ここは、米子市永江にある「支え愛の店ながえ」。永江地区自治連合会を事業主体に、地域住民で運営するスーパーだ。肉、野菜や果物、加工品など日常よく使う食品をメインに、洗剤やトイレットペーパーといった日用雑貨まで、約600品目が並ぶ。また、店の入口側は5つのテーブル席を設けた「交流ひろば」になつており、買い物客がお茶を飲んでくつろぐことができる。

店舗奥には「奥の間」と呼ばれる厨房付きの飲食スペースも。「一昨年ここに移転、約3倍の広さになつ

たので、健康づくりのイベントやコンサートなどいろいろなことができるようになりました」。そう語るのは、ながえの店長であり、永江地区自治連合会長の松井克英さん。事業の始まりから携わり、店舗運営のため日々奔走している。

永江地区は、JR米子駅から車で10分ほどのところにある大規模な郊外型住宅団地。1970年代に開発され、最盛期には4500人ほどが暮らしていたが、現在は約2600人に減少。その間、団地内のスーパーが撤退してしまったことから「買い物困難者」の問題が浮上。そこで地域住民が立ち上がり、鳥取県の助成を受けて、2013年2月に当店をオープンしたのだ。



支え愛の店ながえ
所米子市永江301
0859-26-1520
9時30分～17時30分
(12～2月は9時30分～17時)
休日曜、祝日、年末年始・盆

店の前に定期的に訪れるたこやき屋さんも人気

イメージ一新 滋味に富む逸品

『鹿の会席』4752円(税サ込み)。平日限定、5日前までに5名以上で予約が必要。使用する鹿肉は、県内の若桜町の専用施設で丁寧に加工されたもの。4時間漬け込んだり、6時間煮込んだりと「美味しさに手間を惜しまない」が自慢。

●鹿野温泉 国民宿舎「山紫苑」●

所 烏取市鹿野町今市972-1
0857-84-2211
WB <https://www.sanshien.jp/>



■■和食で昇華するジビエ料理■■

つみれ鍋、焼き合わせ、握り寿司…、会席料理のメイン食材がシカ肉と聞いて驚いた。美しい赤身でやわらかく上品な味わいは、ジビエ(野性鳥獣)のイメージとはほど遠い。牛肉にも似たふくよかさを醸すも、後口はさっぱりしている。

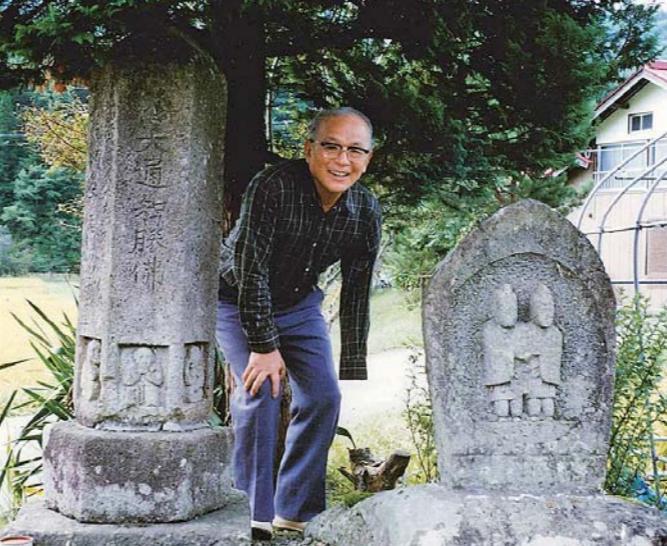
「なじみのある和食で、シカ肉本来のおいしさを味わってもらいたい」と、国民宿舎「山紫苑」の料理長・大羽賢さんが考案した『鹿の会席』。全9品のコース料理は、ロースやモモ、ランプなどの部位を使い、ぬた和え・茶碗蒸しなど、和の逸品に仕立てている。独特の臭みや硬さは、だし汁や野菜とともに漬け込んだり、低温でじっくり加熱したりと和食の技法で解消。一方、ニンニクやショウガでの臭み消しや濃い味付けは控えめにし、シカ肉本来の旨味を壊さないよう、好みを引き出す。

考案から1年、リピーターも少しずつ増えてきた。「シカ肉は滋味に富んだ食材。低カロリーで鉄分も豊富なので、女性にオススメですよ」と大羽さん。駆除したから食べるのではなく、おいしいから食べたいとなるよう、今も試行錯誤を重ねている。

「日本のジビエは日本料理で」。繊細な和食にこだわり、妙味を追求したジビエ料理が堪能できる。

文/岩村利恵 写真/佐野明美

路傍に道祖神を見つけ、急に生き生きとする水木さん(福島県)



3兄弟の極上ティータイム

水木さんの本名は武良茂。2歳ずつ違う3兄弟の次男坊である。

長く水木プロダクションのマネージャーを務めた弟の幸夫さんは「武良三滴」の俳号を持つ俳人で、次の句がある。

『鳶餅 四時の抹茶や 三兄弟』

これは、取材中、私が何度となく水木プロで目にした光景。長兄の宗平さん(水木プロの元代表)が午後に事務所に姿を現すと、毎日のように3兄弟のティータイムが始まるのだ。もちろん、鳶餅が今川焼や大福のこともあり、抹茶が紅茶、珈琲のことも。たびたび目撲するので、「そうか、水木さんにとっての『眞の友人』は兄弟なんだな」と納得した。

というのも、仕事絡み以外の友人から水木さん評を聞こうと探したが、実に苦戦したから。(唯一紹介されたのは果物屋の主人。「会話はないけど買い物の駆け引きが快感」の友人!?)らしい。

進学や就職に挫折し、戦争で片腕を失くし、戦後も食うや食わずで、ずっと社会の傍流を歩んできた水木さん。どの段階でも友情を育む余裕などなかったのだろう。唯一濃密な人間関係は家族、特に少年期を共有し苦難の戦後を支えてくれた兄弟なのだ。

「あの時はどげだった?」「ああアレは、正やんがおらんかったけん……」

菓子の皿を回しながら、方言が飛び交う。その時の水木さんの実に満ち足りた表情が、脳裏に焼きついている。

文・写真/足立倫行
イラスト/ミギワン

花咲く Yokai談

水木しげると身近な妖怪たち

妖怪
ファイル
Vo.5

恐がらせつつ福を招く
ミナマハゲ

—ネット社会に戦々恐々—

2018年11月、全国10地域の伝統行事が、「来訪神:仮面・仮装の神々」としてユネスコ(国際連合教育科学文化機関)の無形文化遺産に登録された。

そのうち、「男鹿のナマハゲ」(秋田県)は、大みそか(元は小正月)の夜、鬼の面をつけてワラの衣装を着た神が「泣子はいねがーい」と大声を出し家々を訪れる厄払いの行事。

手に持つ包丁で、「ナモミ」(火にあたると肌にできる赤いまだら模様)を剥ぐ。これを冬場に怠けがちな人心への戒め「ナモミ剥ぎ」とい、「ナマハゲ」の語源とされている。

一方、南方の3地域の神(薩摩硫黄島のメンドン、悪石島のボゼ、宮古島のバートウ)は旧暦の夏の行事に登場。本来が山の神(祖靈神、農業神)であるナマハゲなどの北方の来訪神とは、やや性格が異なるようだ。

しかし10地域の来訪神はいずれも、仮面・仮装で恐がらせつつ福を招く異形の神、つまり行事に取り込まれた「生ける妖怪」と言える。

*来訪神=年に1度、人々の世界に来訪し、豊作や幸福をもたらすとされる神々

足立倫行(あだち・のりゆき)
ノンフィクション作家。境港市生まれ。同郷の先輩である水木しげるさんに約2年間密着取材し、『妖怪と歩くドキュメント水木しげる』(1994年新潮文庫)※を刊行。主書に『日本海のイカ』『北里大学病院24時』『血脉の日本古代史』など。
※今井書店より復刻版発売中

ミギワン
漫画家・イラストレーター。石川県生まれ、鳥取県育ち。
WEB=<http://migiwan.com/profile>
facebook=<https://www.facebook.com/migiwanroom/>

「倉吉の生活はゆったりとしていて、心地よい」と語る天川さんと妻の麻依子さん



パティシエ(倉吉市)

天川 慎一さん

東京都練馬区出身

- ◎家族構成／妻、子ども3人
- ◎移住前の住まい／東京都練馬区
- ◎移住時期／2017年2月
- ◎現在の仕事／パティシエ

café & Patisserie jaune
(カフェ&パティスリー ジョヌ)

住所／倉吉市新町1-2458
電話／0858-22-5233(日・月・火曜定休)

食材と場所にときめき、

職人魂に火

旬のフルーツ、自然栽培の小麦、平飼いの卵、新鮮な牛のミルク。ケーキの材料は、ほとんどが地元産だ。生産農家と直接コミュニケーションを取って材料を仕入れ、旬のものに合わせて、新作を生み出していく。「パティシエとしてすごく楽しい土地。フルーツをふんだんに使えることで、アイデアも次々湧く。以前は大量に仕入れていたピューレが必要ない」と生き生きと話す。

休日は仕込みや仕入れ以外に、仕事をこなしている。「都会にいた頃より、ずっと人間らしい暮らし。半農半パティシエです」と笑う。水にもこだわり、毎週100トリンもの湧き水を倉吉市関金町の山地へ汲みに行く。その柔らかで甘みのある軟水は、店で出すコーヒーやお茶にも使われている。

現在、「倉吉の代表的な洋菓子」をつくれないかと模索中という天川さん。「この町でしか作れないものを職人として追求し、作り続けたい」と語るその表情は実際に明るく、希望にあふれていた。

From Tokyo



文／倉恒 弘美 写真／萱野 雄一

食の安全を追求していたパティシエが、

倉吉の町で感じたものは「希望」だった。

天川慎一さん(49)は2017年2月に東京都から移住。

ここでしか手に入らない最高の食材との出会いが

イマジネーションを刺激し、新たな味を生み出している。

レトロな街並みの白壁土蔵群の一角で、甘い香りに誘われる。こちらまりとした店内には、地元産フルーツを使った洗練されたケーキが並ぶ。観光客や地元の常連客が次々とやって来ては、どれにしようかと顔を輝かせる。

東京都出身の天川さんが家族と倉吉市で暮らし始めて2年、「子どもたちは風邪をひかなくなり、倉吉弁もすっかり板についた」とうれしそう。天川さんは調理師学校を卒業後、都内有名ホテルで経験を積み、30歳で渡仏。3年間の修行を経て、帰国後に東京都練馬区に店を構えた。人気店として知られていたが、開業から

5年を迎えた頃、東日本大震災での福島原発事故が起こる。それを機に食の安全性をより深く考えるようになり、移住を決意した。

中国地方で移住先を探し、下見には鳥取県内の別の町や岡山県内も訪れたという。「東京では店を軌道に乗せるまで苦労したので、実は移住後には店を開くつもりはなかったんです。でも倉吉を訪れたとき、『ここならできる』とピンときた」と振り返る。



古民家をリフォームした店は、レトロ感があり洒落ている

地元のフルーツをふんだんに使った数々のケーキ



接客は主に麻依子さんの担当



【問】公益財団法人 ふるさと鳥取県定住機構

所 烏取市扇町115-1
鳥取駅前第一生命ビル1階

☎ 0857-24-4740
WEB <https://furusato.tori-info.co.jp/>

IJUターン就職に関する相談

☎ 0120-307-238
(8時30分～17時15分※土日・祝日除く)

移住に関する相談

☎ 0120-841-558
(8時30分～17時15分※土日・祝日除く)
とどり移住定住ポータルサイト
WEB <https://furusato.tori-info.co.jp/iju/>

字文の迷宮をゆく
つれづれ書林女子

いつか見た夏の白昼夢

『8月のソーダ水』コマツシンヤ著(太田出版)

まいだ・かんな
鳥取市出身。郷土堂店主。「自分が通いたい古本屋」を鳥取に作るために2012年10月に古本屋「郷土堂」を開店。古本の販売のほか、陶磁器の修理(金継ぎ)も行っている。

【郷土堂】
■ 鳥取市吉方町2丁目311
■ 080-2940-2127

文・イラスト／前田 環奈

い島で幻と暮らす老画家、散歩する灯台……荒唐無稽な光景なのに、それらは妙に懐かしい既視感に満ちている。自分がうんと小さくて、世界が下がりに見た白昼夢は、そういえばこんな風だったろうか。摩訶不思議な日常をのんびりと享受しながら暮らす登場人物たちは、みな朗らかで平凡だ。そのアンバランスが心地いい。

よく晴れた日、優しい風が吹く日陰で、まどろみつつペーイジを繰れば、つかの間、翠曜岬の住人になる、かもしれない。

青海と空と白い丘に囲まれた街、翠曜岬に住む少女リサちゃんの不思議で楽しい日常を描いたフルカラー漫画作品集。ページいっぱいに広がる涼しげな水色眺めているだけで、口の中にソーダ水の爽やかな甘みが弾けるようだ。浜辺に漂着したガラスのバイオリン、風の缶詰を燃料に空を旅する少年、誰もいな



アイデアで「すくみ足」を大改善

パーキンソン病などで足が踏み出しづらく、転倒しやすくなる「すくみ足」。その症状を大きく改善するサポート機器「Qピット」を開発したのが、有限会社ホームケア渡部建築だ。建築業と介護福祉用品の販売・レンタル業の経験を踏まえ、ものづくりという未経験分野に参入、試行錯誤で成功させた。



代表の渡部和彦さんが、パーキンソン病の患者の住宅に、手すりを付ける改修工事を手がけたときのこと。計画通りに完成したが、「手すりがあつても転ぶことがある」と聞いて驚いた。

すくみ足は、脳からの神経伝達不能により起こる症状で、一步目が踏み出しにくいのが特徴。視覚・聴覚への刺激が有効で、歩幅に合わせて床にテープで印をつけたり、介助者が手を叩いたりして、患者が床のテープを見慣れてしまうと効果が薄れることが問題点だった。これまで杖の先から次の一步の目安となる光が出る商品はあったが、「杖をつく」「歩く」の2つの動作を同時に使うことが難しい人も多い。

「手に持たず、体に器具を装着す

れば歩けるかも」と、思いついた渡部さん。さっそくレーザーポイントと乾電池ボックスを使い、簡易的な試作品を作つてみた。患者に試してもらつたところ、見違えるほどしっかりした歩きぶりに。

「これはいける!」と確信したものの、商品化までの道のりは陥しかつた。レーザーポイントは安全性の問題で法律上の規制があったのだ。県産業技術センターに相談し、LEDライトに変更するなど、そのほかのハードルもひとつずつ越え、



有限会社 ホームケア渡部建築

代表／渡部 和彦
設立／2006年4月
資本金／500万円
所在地／米子市大崎290-1
TEL／0859-28-8487
WEB／<https://www.homecarewatanabe.com/>

voice

■ 121号の感想から ■

私は約36年間、淀屋橋の商社に勤務していましたが、今回の巻頭特集を読み、全く知らなかつた内容に驚きました。昔から商業の盛んな地域であることは知っていますが、淀屋という豪商が住み、ここ一帯のインフラを進め、中之島を発展させ、秀吉や家康にも貢献していたなんて。とても感動しました。このような歴史がわかつたことがうれしく大変、感謝しております。ありがとうございます。

(大阪府河内長野市 角田 泰弘)

鳥取県知事さんの大ファンであり、鳥取には何度も行っています。今回は、倉吉を散策した後、三朝温泉を堪能。そして「とつとりNOW」を初めて目にし、入手しました。丁寧な作りで読み応えもありGOODです。次回も必ずGETします。

(徳島県徳島市 西山 茂美)

「ここにこの人の」の「ロケットくれよん」さんの記事が良かつたです。お二人の温かい人柄もにじみ出でいましたし、素敵な歌声が誌面から聴こえてくるようでした。ぜひ、栃木県でもコンサートを開催して欲しいです。

(栃木県那須塩原市 森本 紀子)

「花咲くYōka-i談」の記事がとても興味深かったです。「妖怪ヨーロッパの妖怪」とは面白いですね。

私は2年前、鳥取県に交換留学しました。その1年間は、これまでの人生の中で一番楽しかった思い出です。その後、3カ月に1度、鳥取から送られてくるこの情報誌がとても楽しく、再び鳥取にいるような感覚を覚えます。これらも鳥取県のさまざまなもの情報を掲載してくださいね。韓国でお待ちしております。

(韓国 パク・スンヒヨン)

巻頭特集で、淀屋と倉吉の深いつながりがあることを初めて知りました。特集の県警音楽隊のプロムナードコンサートには何度も聴きに行つており、知つてはいましたが、消防音楽隊の存在は今回初めて知り、新鮮でした。

(鳥取県鳥取市 川上 順)

職場で毎号、目にしていたものの、遅ればせながら、今回初めて拝読しました。アート、歴史、食べ物、頑張っている方々など、多方面で知的好奇心を満たしてくれた記事が満載ですね。大変、楽しみながら最後まで読みました。

(鳥取県鳥取市 山口 美穂)

2017年12月、ようやく「Qピット」が完成。発想から3年を要した。

ベルト付きの小型の本体を腰に巻きつけ、電源を入れると、緑色の光線が床に照射される。さらにイヤホンを通じてリズミカルな電子音が刻まれ、聴覚を刺激する仕組みだ。線をまたぐように歩くことで、光を追いかねながらテンポ良く足が動かせる。

多くの患者で効果はめざましく、装着前後を比べた動画は「本当に映像なの?」と驚かれるほど。全般的な福祉・医療機器販売業者を通じて販売している。

ト」が完成。発想から3年を要した。ベルト付きの小型の本体を腰に巻きつけ、電源を入れると、緑色の光線が床に照射される。さらにイヤホンを通じてリズミカルな電子音が刻まれ、聴覚を刺激する仕組みだ。線をまたぐように歩くことで、光を追いかねながらテンポ良く足が動かせる。

多くの患者で効果はめざましく、装着前後を比べた動画は「本当に映像なの?」と驚かれるほど。全般的な福祉・医療機器販売業者を通じて販売している。

ト」が完成。発想から3年を要した。ベルト付きの小型の本体を腰に巻きつけ、電源を入れると、緑色の光線が床に照射される。さらにイヤホンを通じてリズミカルな電子音が刻まれ、聴覚を刺激する仕組みだ。線をまたぐように歩くことで、光を追いかねながらテンポ良く足が動かせる。

読者プレゼント

応募〆切
2019.
6/30
消印有効

■応募方法

下記の項目を記入し、ハガキまたは電子メールでご応募ください。

- ① 希望の商品記号または商品名
- ② 掲載記事への意見・感想
- ③ 応募用クイズの答え
- ④ 住所・氏名・年齢・電話番号

※②の感想が次号の「VOICE」に掲載される場合、住所・氏名が明記されるところをご了承ください。また商品の当選をお伝えする場合は、発送をもって発表に代えさせていただきます。

■応募先

〒680-8570 鳥取市東町1丁目220
鳥取県広報連絡協議会(鳥取県庁内)
「とっとりNOW読者プレゼント」係
メールアドレス: now@kouhouren.jp
※お預かりした個人情報は、プレゼント発送以外の目的に使用することはございません。

●応募用クイズ●

Q

ストーブが中で使える三角形のテン
トの名前を何という? 空欄の3文字
にカタカナでご記入ください。

□ イ □ テ □ ン □ ト

121号の答えは
「辰五郎」
※「巻頭特集」の
記事中に正解あり。

C



[3名]

「宇宙芋・自然薯かりんとう」セット(各130g)

県産の自然薯と宇宙芋をおから入りの生地に練り込んだかりんとう。ポリフェノールやビタミンなどの栄養価が高く、自然な甘味でサクサクした食感。

問 カわはら市場

☎ 0858-85-5060

A



漆塗りスプーン

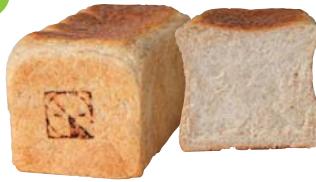
[3名]

塗師(20頁参照)が手がけた木製スプーン。漆の色使いが表と裏で異なり、オシャレでモダンなデザイン。木地は竹で手に馴染み、使いやすい。

問 會州堂

☎ 0858-75-2228

B



[10名]

高級食パン「ガラプラン」(1斤)

国産小麦に大山町産の豆腐と米麹、ふすまを混ぜ低糖質にこだわった。しっとりモチモチの食感。「FOODEX美食女子Award2019」金賞受賞。

問 美食パン専門店GaLa

☎ 0859-38-5267

F



かにみそバニーナカウダ(130g) [3名]

境港産ベニズワイガニのカニ味噌を贅沢に使用したディップ。濃厚な旨みで、野菜やクラッカーに付けるほか、パスタソースや調味料にも。

問 株式会社門永水産

☎ 0859-44-3012

G



とっとりのはとむぎ茶(500ml×6本セット) [4名]

じっくり焙煎した県産ハトムギを使用したノンカフェインのお茶。はま茶を20%ブレンドしたこと、香ばしさにまろやかさが加わり、後味もすっきり。

問 JA鳥取いなば

☎ 0857-32-1143

H



蜂蜜「蜂みっちゃん」(200g) [2名]

大山山麓で飼育するニホンミツバチが集めた純粋な百花蜜。全国的にも生産量が少ないとため、希少価値が高い。まろやかですっきりした甘みが特徴。

問 大山はちみつ本舗

☎ 0859-27-4271

Editor's note

□ ■編集後記 ■□

何かがやんわりとほぐれ、ゆっくり溶けていく感覚に包まれた。仕事に生活に、人間関係に、ストレスフルな日々。知らないうちに心身、固まっていたのか。▽取材でお邪魔した「住民スーパー」、(22頁)での数時間のこと。訪れる地域の皆さ

んと店員さんとの何気ない日常の会話、お茶会でのおしゃべり…。その空間にいるだけで癒やされたのは、そこに笑顔の花が咲いていたから。▽「支え愛」とは、誰が名付けたのか、素敵なネーミングだ。人は人とほんのちょっとだけでも、心が通い合えた時、生きるエネルギーが沸く。沈んでいた心にもぱっと火が灯るのだ。時代も年代

も関係なく、その法則は変わらない。▽そうそう、おしゃべりや笑いは、顔の筋肉を鍛え、シワやたるみ防止の美容効果もあるという。どうりで皆さん、キラキラとまぶしかったわけだ。「とにかく笑っていれば大丈夫よ」。さぞ荒波、乗り越えて来られたであろう諸先輩、さすがだ。忘れがちな大切なことに改めて気づかされた。【Hi】

とっとり
NOW
鳥取県総合情報誌 vol.122
Summer

《企画・編集・発行》鳥取県広報連絡協議会
〒680-8570 鳥取市東町1丁目220(鳥取県庁内)

《制作》株式会社セイセイ堂デザイン
〒680-0841 鳥取市吉方温泉3-802 TEL.0857-22-1122

0857-26-7086

0857-29-6621

とっとりNOW

検索

<https://www.kouhouren.jp/>
2019年6月1日発行 定価309円

【次号予告】巻頭特集「鳥取県が誇る氷温の技術」(仮題)

とっとりNOW vol.123 2019年9月1日発行